
仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー ～交差する三つの物語～

未元定規

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー ―交差する三つの物語―

【Nコード】

N9268Z

【作者名】

未元定規

【あらすじ】

『死者が蘇る』、『ドッペルゲンガー』、『鏡の中の怪物』―そして、『仮面ライダー』。この町は不思議に満ちている。でも俺は、そんな物には一生関わらないであろう―そう思っていた。でも現実は違った。俺たちの気づかない場所で、物語は進んでいたんだ―オリ主三人による、同時進行はMOVIE大戦式章ことです。感想に制限は無いので垢無い人でも自由に意見お願いします。中傷除く駄目出しする時はここが駄目だからこうするといったなど教え

て下さると励みになるので協力お願いします。

ブローグー夢ー（前書き）

初めまして、未元定規です。

しばらく前にデルタを投稿しましたが、設定変わりました
なので、いっそもう連載始めます。

それでは、スタート。

プロローグ ―夢―

――世界は無限に広がっている。

しかし、世界は広いようで、意外と狭い。例えば世界には同じ顔をした人間が三人は居るというが、この町だけで自分と同じ姿を見たという人が居るらしい。都市伝説だが、平行世界パラレルワールドなんて定義もあるが、それはこの物語を語るのにはあまり必要では無いだろう。

だから、小説やアニメなどの導入でよくある物の一つ、ある日突然日常が崩れさってゝな展開は意外に自分のすぐ隣にあるかもしれない。それでもそんな機会が無く一生を過ごす者が多いのは、運が良いのと、灯台下暗しという物であろう。いつもの日常と違う事があっても大して気にしなかったり、人間はそれを自分の知識で認識した物を片づけようとする。物事を何かに例えるのもその一種だ。

つまり、運が無く、周りに敏感で、自分の知識で片づけられない事が起きたらそこで日常は終わるのだろう。

――――

「……………うん、」

少年が目を覚ますと、そこは見知った自分の部屋のベッドの上。見慣れた天井が目に入ってきて、数秒間思考を停止させた後、ゆっくりと体を起こす。

魔^{うな}されていたのか、着ている物は汗でぐっしりと濡れている。

「また、か……」

はあ、と溜息をつき、汗まみれの体に不快感を示しながら、額に手をやる。すると、頬に涙が垂れているのに気づき、枕元のタオルで拭う。

こんな不良にしか見えないような自分が夢で泣いていたら変な光景なんだろうな、と自虐気味に笑い、鏡を見る。

そこにはいつもと変わらない、青み掛かった髪、目つきの悪い双鉾をした自分の姿があった。

こうなってしまうのも、全部近頃見る変な『夢』のせいだ。

一週間ほど前からみており、内容は全く思い出せないが、何故だかとても悲しく、物苦しい夢だという事は覚えている。

まるでアニメか小説か何かのプロローグみたいだなー不思議な夢を見る主人公はある日突然、日常が壊れ、戦いの日々が始まるーまあ、そんな物は御免被りたいが。そういえば、記憶喪失で捻くれている性格の主人公の世界が崩壊し、世界を救う旅に出るーみたいな内容の小説のタイトルは何だったのだろうか。

そんな意味不明な夢にももう慣れてしまった。そもそも、内容も分からない夢に慣れた、というのもおかしい話だとは思うが。

自分の変な適応能力に嫌気が差しながらも、結局は大して気にしていない自分の神経の凶太さにも感心してしまう。慣れというのは本当に怖い物だ。

そのままベッドから降りて立ち上がり、そのまま歩いてカーテンを勢いよく開ける。

差し込んでくる日光を全身に浴び、伸びながら目を開ける。そこにはいつもと変わらない町並みが広がっていた。たかが自分程度の人間に何か問題があってもこの世界は機能する。そう考えるとなんだか悲しくもなってはくるが。

時計を見るといい時間になっている。そろそろ着替えるとするか。

ぼんやりと鏡を見ながら自分の通う虹陵館学園の制服を着る。赤を基調としたカラーリングで、女子からは人気がある。男子は『顔が良い奴が着れば』カッコよく見えるのではないだろうか。知り合いにはそんな奴は居ないが。ホスト崩れのような容姿の『本物の不良』と、カッコ良いよりは女子には『可愛い』と称される奴しか。間違っても自分は顔が良いと思う人間は居ないだろう。

俺、不条龍一の一日は、今日も始まる。

ブローグー夢ー（後書き）

明日は二つ目投稿。

プロローグー記憶ー（前書き）

プロローグはgdyっているのは自覚があります。どうも僕、始まりを書くのは苦手で……！興味を持ったけど、文章力にがっかりした人は、せめて本編が始まってそれを読んでから判断して下さい……！それと、少しタイトル変えてすみません。タイトルじゃライダー物と分かりにくいと思ったので……。

ちなみにプロローグ冒頭の文はその回の主人公の口調に似せた三人称なので、本人は言ってません。その後似たような事書くのはその為です。

それでは、スタート。

ブローグー ー記憶ー

ーー人の記憶は非常に曖昧だ。

ちょっとした事はすぐ忘れてしまっし、暗記をしようとしても長い文章だと思えば出せなくなる。勉強が苦手な人が多いのには、内容が覚えられないというのが一つあるだろう。ただ勉強出来ないのをそっやって責任転嫁するのは問題外だが。

しかし、記憶は人格を構成する重要なパーツの一つだ。親に愛されて育てられれば優しい性格に育つだろうし、虐待や虐めを受けて育ったら暗かったり、乱暴な性格に育つだろう。

ならば、そのパーツがない僕はなんなのだろうか。この人格は何で出来ているのだろうか。

ーー僕は、『本物』なのだろうか。

――――

カチャカチャと手の先で物音をたてながら朝食を作る。

今日のメニューはシンプルに目玉焼きに野菜炒めに味噌汁。それに、五穀米混じりの白米だ。

朝から二人前のご飯を作るのは学生の身分ではなかなか難しい事だが、僕には家事をする義務がある――いや、単に僕がそう考えるだけなんだけど。

そう考えてしまうのも、僕がこの家の人間ではないだからだ。

別に拾われてきて家事を強いられて、虐待を受けられている――
――なんて外国の童話のような重い話はあるわけがない――とも言
い切れないのは問題な気がする。いや、悪い意味じゃ無いんだけど
ね？

僕は『記憶喪失』だ。

よく創作では話を聞くけど、本人にとってはたまったものじゃない。
い。自分が何者なのかさえ分からないのだから。道に迷うと余程脳
天気な人ではない限りは不安になるだろう。それを人生に置き換え
たような物だ。自分が何故ここに居るのか、ここは何処なのか、自
分は誰なのか。全てが分からない。

そんな風に、道をさまよっていたら、『彼』に手を差し伸べられ
た。

――お前、俺と……昔の俺と同じ『目』をしてるな。お前、名前
は？

……ない。

――なんでだ？

……僕、記憶が無いんだ。ここは何処なのか、僕が誰なのか……
みんな分らない。

――そうか……。……なあ、お前さ、俺と一緒に来ないか？

……え？ 見ず知らずの他人だよ？

――それがどうした。

……え？

――困っている奴が居たら、手を差し伸べちゃ駄目なのかよ。

……！

真っ暗な自分に光が点ったかと思った。その言葉は、とても心に染みた。ぽろぽろと涙をこぼした。そして、僕はその差し伸べられた手をとった。

――そっぴや名前無いんだっけ？　そうだな……じゃあ、こんなクソ寒い凍るような雪の上に居て、ゼロからのスタート、って意味で――

「――凍上零、か。ふふっ」

「――凍上零、か。ふふっ」

朝起きて来ると、居候が朝食を作りながら自分の名前を呟きながら笑っていた。こんな光景を目にした時、どんな表情をすれば良いのか分からない。……笑えば、良いんだろうか。

「ああ……えっと、おはよう、零」

「ふべやああああ!!??」

零が奇声を上げながら動かしていたフライパンをはね上げる。どっからあんな声出るんだろうな――って、

「ぬおおおおお!!」

空中に舞う目玉焼きから目を離さないようにしながら、必死に手を伸ばして皿を掴む。そして、落下地点にジャンプする。

「跳べよおおおおお!!」

無機物に留まれという思いは通じない……というか、届いても重力には逆らえない。ならばこの思い、皿に乗せてお前に届けー！
ここは、俺の距離だ！

ずざつ、とスライディング式に停止し、後ろを振り返る。目玉焼きはーきちんと皿に乗っていた。

「はぁ……なんとか間に合ったか」

「ごごご御免不条君！ 大丈夫！？」

「あ、ああ。大丈夫だ。急に声掛けた俺も悪かったしな。ま、何はともあれ飯だ。飯。とっとと食おうぜ」

「う、うん」

体に付いた埃を払い、一応石鹸で手を洗う。気にし過ぎだろうが。もしかしたら俺、潔癖症のケでもあるのだろうか。

零も顔を赤らめながらしゅん、と沈んだ様子のアホ毛気味の髪の毛を上げーって毎回気になるんだが、それ感情とリンクでもしてるのか？

「じゃあ、食べよっか」

「おっ」

「「いただきます」」

これは、僕――凍上零を形作る、――ページ。

ブローグー記憶ー（後書き）

紹介は変身が終わったら書きたいと思います。

今更ながら、タイトルがネクサスっぽいな……。

次回は地の文がカオス。明日投稿。

ブローグー意義ー（前書き）

ネタだらけなのに、唯一ライダー要素が出てくるブローグラスト。
ライダーは分かりますね。

それでは、スタート。

ブログー意義ー

短い人生において、自分の生きる意味を見いだせる人間は限りなく少ない。

大抵の人間はただなんとなく生き、仕事をし、死ぬのでは無いのだろうか。

子供はそんな未来の事を考えない。目先の事に目を向けているから。大人に近づくにつれ、学習し、成長するのだろうか。

ならば、子供の頃から存在意義について考え、問いたらどうなるのだろうか。

答えは簡単だ。全てに飽きる。

存在意義を求め、勉強・スポーツ……色々な物を極めるにつれ、

序々に全てが馬鹿らしくなっていく。これが天才の到達する極みなのだろうか？　ならその極みにある勝利が是非とも欲しい所だが。

何故そう言い切れるかって？　それは――

俺がそうだからだ。

――

チュンチュン、と小鳥の鳴き声が窓の外から聞こえてきて、目を

覚ます。

「ん……」

重い頭を起こしながら、体を伸ばす。体の節々からバキバキという音が鳴り、気持ち良い。いや、自分がMとかという意味ではなくな？ 偶にあるだろ、気持ち良いバキバキ音が鳴る時。アレだよ。ドカバキなんて音が鳴ったらそいつは人間じゃねえ、種別的な意味で。

跳ねた髪を適当にほぐしながら時計を見る。時間は普段家を出る少し前だ。いつもより寝すぎただろうか。

（『仕事』の疲れが残ってたかな。やれやれ、ヒーローは忙しいねえ。どちらかというとダークヒーローだが）

ククツ、と趣味の悪い笑い声を上げる。お世辞にも良い笑い方とは言えないが、癖なのだから仕方ない。直らない物は直らないのだ。神経質な人間が無意識下で爪を噛む奴くらい。神経質なのに、爪を噛むのは良いのだろうか。余程手入れしてないと爪ってそこまで綺麗

麗じゃないよな。

そんな下らない事を考えながら服を着替える。寝巻の下に下着を着ない主義の俺は上着のジャージを脱ぎ、胸板を晒す。

その自分の姿を鏡を見て、目を閉じ、力を込める。

「……………ふっ！」

すると、胸板に金色の光と共に、蜂の紋章が浮かび上がる。中央には『ZECT』の文字が彫られており、それなりの大きさだ。

「よし、大丈夫だな……………」

それを確認し、力を抜く。それに従って紋章も消える。

これは、俺の存在意義――証のような物だ。これがある限り、俺は俺で居られる。何なんだお前はと問われても、俺は、俺だあ！と返せる自信もある。そんな機会滅多に無いと思うが。

ぼんやりと着替えを済ましている内に、

「お、もうこんな時間か」

もう家を出る時間になり、冷蔵庫からカロリーメイト（チョコ味）を取り出す。まったく、チョコレートは最高だぜ！

一口で吸い干すと（変な言い方だが）、ゴミ箱に狙い打つぜ！――よし、命中。それじゃ、ぼちぼち行きますか。

――――

家の前の地獄坂と呼ばれる坂を転びそうになりながら駆け降り、朝の登校連中に混ざる。

そして、その中から見慣れた二人組を発見する。

「朝のあいさつ、即ち『おはよう』という言葉を謹んで贈らせてもらおう！」

「いや、全然謹んでないけど……。まあ、今更だから良いや。おはよう雨宮^{あまみや}君」

「……………」

友人である女顔のアホ毛が特徴の凍上零は返すが、もう片方の不条龍一にはスルーされる。

「デメエ！ 聞こえてんのかぁ？ それともスペシャルを前にビビっちまったかぁ？」

「……………」

無視かよ！ 何！？ こいつの中でファーストフェイズでも開始してんの？

「無視してんじゃねえ！ 呪うぞー！」

「どれだけ反応しないのさ……馬鹿げているよ」

「……………」

「なあ…………、マジでそろそろ反応してくれよ…………」

「なあ…………、マジでそろそろ反応してくれよ…………」

…………耳元でうるさい蠅が騒いでるな。

「うるせーな…………寝れねえじゃねえか」

「寝れない！？　おいおい、この作品随一のクールキャラが俺以上のボケかましやがった…………」

「で、本音は？」

「別に……」

（おい凍上。何で不条機嫌悪いのさ）

（僕は何もしてなーはっ！？ まさかフライパンで目玉焼き跳ね上げた奴のせいか！？）

（お前等ホント何してんの！？）

……そうだ、気のせいだ。俺はいつも通り……いつも通りだ。何も変わってはいない。

「ほら、馬鹿言っていないで行くぞ。遅刻する」

「誰のせいだ誰の!」

「は?」

いつもと変わらない日常は続く。

そう今日までは思っていた。

ブローグー意義ー（後書き）

今回は龍一SIDE。一話をA、Bに分けて二部構成、一話やった
ら別章で進めます。

龍一1A 龍一1B 零1A 零1B 凍司1A 凍司1B 龍一
2A

という事。1と2の間に紹介挟む予定ですけど。

次話は明日投稿。今年最後だって特別なんて無いぜ！

不条SIDE・デルタ（前書き）

今年最後の投稿。なんとか本編に入れた。

不条SIDE：デルタ

学校が終わり、放課後。

今日も何事も無く、いつも通りの日常を過ごし、帰宅路についている。

何も変わらない、平凡過ぎる日常。

（そうだ……。変な夢を見たからって、俺の日常が簡単に壊れるわけがない。夢というのは記憶の整理だ。昔見た映画か何かが混ざってんだろ。大体たかが夢程度にどれだけビビってんだ、俺は。柄にも無い）

ずっと気にしすぎの事を頭を振って忘れる。気にしなければ、どうという事は無いのだから――

今日は珍しく一人だ。零は今日は日直で居残り、雨宮は何か用事があるらしく、先に帰ってしまった。

一人で帰るなんて事はあまり無いので慣れないな、と思いつつ今日は特に予定も無いので、本屋で立ち読みをしたりして時間を潰す。立ち読みだけだとさすがに失礼だと思い、適当に雑誌と参考書を買う。

やる事も無くなり、寒くなってきたので帰り道を急ぐ。

ふと、横を見る。すると――

（アレは……雨宮？ あんな表情するなんて珍しいな）

裏路地を一つ挟んで向こうの通りを駆けていく雨宮が見える。その顔には普段おちゃらけた雰囲気からは想像出来ない真面目な表情をしていた。

(……まあ、大して気にする事でも無いか)

アイツにはアイツなりの事情があるのだろう。それを詮索する物では無い。

秋風に震えながら、それを見送って歩みを再び進め始めた――

――――
「ただいま、っと」

今日は零が居ないので返事が返ってこない。それを頭では分かっているても、違和感について襲われる。日直にしては遅すぎる気もするが、何らかの事情があるのだろう。

そこら辺に鞆を放り投げ、冷蔵庫から出したコーヒーのプルタブを開ける。どんな事があっても、コーヒーさえ飲めばとりあえずは落ち着ける。

コーヒーを飲み、一息ついて制服から着替える。やや肌寒い季節になってきた為、パーカーを羽織る。

ピンポーン

「ん？」

すると、玄関のチャイムが鳴る。

「はい、どちら様です？」

「宅急便です。不条龍様のお宅でよろしいですか？」

「あー、はい」

「お届け物の配達に来ました。こちらにサインお願い出来ますか？」

「不条、っと……ご苦労様です」

「はい、どうも」

「結構重いな……」

届いた荷物はキャリアバック程の大きさだが、中身はそれなりに重い。

「送り主は……書いてないな」

何処を探しても送り主の名前は書いていない。こんな正体不明の物体、送り届けて問題無いのだろうか。何かあったら責任とれるのだろうか。

「いちいち気にしてちゃ仕方無い、か……しょうがない、開けるか」

少し嫌な予感がしたが、意を決し、封をびりびりと破る。

堅く、袋に見合う大きさをしているのか周りの風霜が剥ぎにくい。

それでも躍起になって剥ぐと、中にはアタッシユケースが入っていた。

「なんだこれ……スマートブレイン……？ 電子機器が何かか？」

スマートブレインと言えば、SMART BRAINのロゴで馴染みの大手企業だ。主にケータイ、バイクなどの電子機器を開発しているらしい。当初はあまり名前を聞かなかったが、最近になって有名になりぐんぐんとその知名度を上げている。何でも最近変わった新社長の腕が良いらしい。エリート様は羨ましい限りだが……。

アタッシユケースの中には――

「なんだこれ……ベルト？」

蓋の上側には白と黒のラインが入った前にメモリーらしき物がささった妙なベルト。下側にはまるで銃のようにトリガーのついた謎の持ち手。恐らく左の部品と組み合わせるのであろう。それに、英語で書かれた取扱説明書らしき物もある。

だが、今はそんな事はどうでも良かった。

これを見たとき、何故だか自分はこれを知っている――そんな気がした。そんな衝動に駆られた。

動悸が激しくなる。呼吸が荒くなる。

まるでしばらく会っていなかった相棒を見たような気分になる。

ふるふると震える指でベルトを――手にとった。その瞬間、

「ーぐ、あああああああああああー！！！！！！！！」

頭が激痛に襲われ、絶叫する。まるで頭が割れるようー脳に蹉跌が刷り込まれているようー例えは何でも良い。全てが当てはまる。

どれくらい時間が経っただろうか。脂汗を玉のように流しながら、いつの間にか激痛は治まっていた。

「デルタ……………」

一息ついて、放った一言にはっとする。

今自分は何と言った？ デルタ？

何故俺はこれの名前を知っている？

先ほどとは別の意味で呼吸が荒れる。自分は何故初めて見た物の名前を知っている？

得体の知れない恐怖に体が震える。歯が自分の意思とは関係なく震えて力チ力チとなる。

その時、

P
i P
P i P
P i P
P i P
P i !
!

「うわぁ!？」

突如持ち手のような謎の部品から電子音が鳴る。存外間抜けな声を出した自分に呆れるが、そんな場合では無い。

音はまだ鳴り続けている。何かの警告音のような類とは違つ。むしろこれはよく聞く音だ。これは――

「電話……?」

そう、ケータイの初期設定にありがちな着信音だった。

震える手で、先ほど呟いた事と、何故かこれが頭に浮かんだったので、デルタフォンと名づけた物を取る。これから音が鳴っている。しかし、これにはボタンらしき物が無い。トリガーを引けば、良いのだ

ろっか。

指でトリガーを引く。すると、

『電話に出れた……と、いう事は無事届いたようです』

スピーカー部分から聞き慣れない声が聞こえてくる。声色のイメージからスーツをぴちっと着た奴だが。

「アンタが俺にこいつを送ったのか!? 答えろ、こいつは何なんだ!」

『何をそんなに取り乱しているんです？』

「触った瞬間、頭に激痛が走った物なんて送られて、動揺せずにいられるか！」

『頭痛……………？』

「なんだよ！ その反応！ まるで自分は知りません、みたいな反応しやがって！ ム力つくんだよ！ なんなんだよ……………デルタって……………」

『！ その名前を何処で！？』

「あ？ 知らねえよ……………触ったら何故か呟いてた」

『ふむ……………資格者に選ばれたから分かったのか……………？ あの様子だとまだ取説も読んでいなさそうだし……………。選ばれるだけの運命力があつたのか……………。しかし、どうやらベルトの毒にややあてられてい

るようだー』

「何ぶつぶつ言ってやがる？」

『いえ。……不条龍一さん。貴方はそれがなんなのか知りたいですか？』

「……………ああ。こんな訳の分からない物を手元に置いとくわけにはいかないしな」

『それではこれから言う場所に来て下さい。そこで全てをお話ししましょう』

そう言うと、相手は町外れの工場を指定する。

電話を切った後も、俺はしばらく動けずにいた。

電話をしている間の俺は、まるで何かに駆られたように激情に身を任せて喋っていた。後半になるにつれ、徐々に落ち着いてきたが、まるで自分が自分じゃなくなるようなあの感覚。あれは何だったのだろうか……。

頭が冷えて冷静になってきてから、事の重大さに気づき始める。もしかしたら自分は、とんでもない事に巻き込まれようとしているんじゃないか？

自分の掌てのひらを見つめる。震えはもう治まっていた。それをぎゅつ、と握ると紙とペンを手に取る。

『零へ』

悪い、ちよつと出かけてくる。もしかしたら遅くなるかもしれないから先夕飯食べててくれ』

そう書き置きを残し、パーカーを脱いで制服の上着を羽織る。

そして俺は、指定された場所へ走り出した――

不条SIDE：デルタ（後書き）

次回は未定。紹介になるかもしれないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9268z/>

仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー ～交差する三つの物語～

2011年12月31日21時45分発行